

## 吉岡利忠教授 経歴

2021（令和3）年4月1日

よしおかとしただ

吉岡利忠 [1943（昭和18）年5月3日生] 青森県弘前市出身

弘前学院大学 学長、青森県立保健大学 名誉教授、聖マリアンナ医科大学 客員教授

- 昭和34年3月 弘前大学附属弘前中学校卒業  
昭和37年3月 青森県立弘前高等学校卒業  
昭和43年3月 東京慈恵会医科大学卒業  
昭和44年5月 東京慈恵会医科大学助手・講師  
昭和51年6月 東海大学医学部助教授  
昭和56年10月 ペンシルバニア大学医学部助教授（昭和59年3月まで）  
昭和63年5月 聖マリアンナ医科大学主任教授（平成11年3月まで）  
平成9年11月 第43回日本宇宙航空環境医学会総会 総会長（神奈川県民ホール）  
平成10年9月 第53回日本体力医学会大会 大会長（パシフィコ横浜）  
平成11年4月 青森県立保健大学 副学長（平成16年3月まで）  
聖マリアンナ医科大学 客員教授（現在に至る）  
平成12年9月 日本医師会認定産業医（現在に至る）  
日本体力医学会認定健康科学アドバイザー（現在に至る）  
平成13年4月 日本運動生理学会 理事長（平成16年3月まで）  
日本医師会認定健康スポーツ医（現在に至る）  
平成16年4月 弘前学院大学 学長（現在に至る）  
青森県立保健大学 名誉教授（現在に至る）  
平成18年4月 日本体力医学会 理事長（平成24年3月まで）  
日本体育協会公認スポーツドクター（現在に至る）  
平成18年8月 日本学術会議 連携会員（平成23年9月まで）  
平成21年4月 財団法人北陸体力科学研究所 常務理事（現在に至る）  
平成22年4月 財団法人環境科学技術研究所研究倫理委員会委員長（現在に至る）  
平成22年4月 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）有人  
サポート委員会専門委員宇宙飛行士健康管理委員（現在に至る）  
平成24年4月 一般社団法人弘前市医師会理事（現在に至る）  
平成24年4月 東京慈恵会医科大学青森県支部長（現在に至る）  
平成24年6月 健康あおり専門委員会委員長・部会長（現在に至る）  
平成24年10月 日本ニューマンケア科学学会第7回学術集会長（弘前ホテルニューキャッスル）  
平成27年4月 日本体力医学会名誉会員（現在に至る）  
平成27年4月 一般社団法人日本体育学会名誉会員（第323号、現在に至る）  
令和2年8月 弘前れんが倉庫美術館運営審議会委員

### 賞罰

- 平成12年6月 秩父宮記念スポーツ医・科学賞、奨励賞  
平成15年1月 神奈川県体育功労者賞

- 平成17年7月 国際健康コミュニケーション科学学会、功労賞
- 平成19年3月 中富健康科学振興財団、中富健康科学振興賞
- 平成20年8月 国際コミュニケーション科学会議、特別功労賞
- 平成27年3月 公益財団法人神奈川県体育協会 功労賞
- 平成27年7月 日本運動生理学会第16回学術功労賞
- 平成28年10月 日本宇宙航空環境医学会第8回学会功労賞
- 令和3年2月 弘前市スポーツ賞 功労賞
- 令和3年4月 弘前学院大学名誉教授 (第2号)

これまでに、故東京慈恵会医科大学の文化勲章受章・勲一等瑞宝章受章故名取禮二名誉学長・理事長、勲三等瑞宝章受章故酒井敏夫名誉教授、ペンシルバニア大学医学部の故 A. P. Somlyo 教授、東海大学医学部の瑞宝中綬章受章故中野昭一名誉教授に師事し、筋肉生理学、体力医学、スポーツ医学、宇宙医学などの研究に従事し、日本体力医学会、日本宇宙航空環境医学会、日本運動生理学会、日本体育学会の理事および理事長などを務め、これらの分野の発展に貢献した。

## 吉岡利忠教授 主要研究業績

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
I 著書				
1. 運動療法	共著	昭和53年6月	朝倉書店	編集：阿部正和、小野三嗣 運動療法に対する基礎的知識およびその概説書。いくつかの運動療法について記載。 II. 運動の各臓器・組織に対する影響 9. 内分泌臓器 (P194-209) 吉岡利忠、中野昭一
2. 図解生理学	共著	昭和56年1月	医学書院	編集：中野昭一、共著者：中野昭一、吉岡利忠 図解を主とした人体生理学の概説書。医歯薬系学生必携の参考書。下記を分執筆 III. 循環系 (P69-128) VIII. 排泄系 (P281-304) X. 生殖系 (P365-386) X II. 運動系 (P455-480) X III. 感覚系 (P481-548)
3. 新生理学 (第5版)	共著	昭和57年3月	医学書院	編集：問田直幹、内菌耕二、伊藤正男、富田忠雄 わが国を代表する生理学概説書。 担当部分： 第3編 骨格筋の一般生理学 (P138-167) 酒井敏夫、吉岡利忠
4. 人体の生理学 一機能と形態一	共著	昭和57年3月	廣川書店	編集：坪井實 人体の構造と生理機能を概説した教科書。下記を執筆。 第3章 筋の形態と機能 (P64-92) 第12章 脳・神経 (P239-269) 第13章 感覚 (P270-301)
5. NHKサイエンススペシャル驚異の小宇宙、 人体,Q&A	共著	平成2年2月	日本放送協会出版	NHKTVで特別番組として放送され、それに質問された事柄に対する解答集。 7. 筋肉 (P177-204)
6. 航空・宇宙医学の現在と未来	共著	平成8年5月	医歯薬出版 A5版 全127頁	編集：飛鳥田一朗、関口千春 微小重量環境がもたらす筋肉の変化について、宇宙生理学を概説。微小重力環境が骨格筋機能に及ぼす影響について記載した。(P87-95)
7. 人体機能生理学	共著	平成8年5月	南江堂 B5版 全662頁	編集：杉晴夫 人体の生理機能を総説した専門書。下記を執筆。 第16章 消化と吸収 (P439-467) 第17章 栄養と代謝 (P469-493) 第18章 尿の生成と排泄 (P495-508) 第19章 体温とその調節 (P509-518)
8. 宇宙医学・生理学	共著	平成10年8月	社会保険出版社	監修：関口千春、吉岡利忠 人体の宇宙医学に関する概説書。下記を執筆した。 III - C 筋肉 (P57-79)
9. 生体機能学テキスト	共著	平成13年4月	中央法規	編集：吉岡利忠、内田勝雄 ライフサイエンスに係る人達への専門書。特に医歯薬系、理学療法士、作業療法士、看護系学生を対象としたもの。下記を執筆。 III. 骨格筋の解剖 (P296-299) IV. 筋収縮のしくみ (P300-312) V. 筋収縮エネルギー (P309-312) VI. 筋収縮の力学的性質 (P313-317) VII. 筋トレーニング効果 (P318-320) VIII. 筋収縮のメカニズム (P321-322)

10. 人体機能生理学改訂 第4版	共著	平成15年2月	南江堂	人体生理学の専門書 第16章 消化と吸収 (P437-464) 第17章 栄養と代謝 (P465-492) 第18章 尿の生成と排泄 (P493-506) 第19章 体温とその調節 (P509-516)
11. 分子の目でみた骨格 筋の疲労	共著	平成15年6月	NAP	監修: 吉岡利忠 骨格筋の疲労について、分子レベル、細胞レ ベル、組織レベル、器官レベルで解説した専門書。 ・細胞膜興奮の分子機構 (P50-70) ・細胞内情報伝達系の疲労 (P126-150)
12. 筋力をデザインする	共著	平成15年9月	杏林書院	編集: 吉岡利忠、後藤勝正、石井直方 筋力発揮に関する基礎的研究成果を加えた専門書 1章 骨格筋の構造と筋力の発生 (P 3-16)
13. 人体機能生理学 改訂 第5版第1刷	共著	平成21年11月	南江堂	編集: 杉晴夫、宮崎俊一、岡部晴生、石井邦雄、 金子章道、栗原敏、三枝木泰丈、中山貢一、吉岡 利忠、明間立雄 第16章 消化と吸収 P441-468 第17章 栄養と代謝 P469-498 第18章 尿の生成と排泄 P499-512 第19章 体温とその調節 P513-522
14. コメディカル専門基 礎科目シリーズ 解剖学	共著	平成25年2月	理工図書	シリーズ監修: 吉岡利忠 編著者: 澤田和彦、坂田ひろみ P 1-416
15. 「医療福祉学総論」 5章. 高齢者の医療福祉	共著	平成29年12月	金芳堂	日野原重明、間野忠明 (監修) 星野政明、岩瀬敏、土田耕司 (編集) 葛西久志、吉岡利忠 (5章) (P44-49)
II その他				
(翻訳)				
1. The Anatomy Coloring Book Wynn Kapit/ Lawrence M. Elson	共訳	昭和58年5月	廣川書店	監訳: 嶋井和也 アメリカで発行された医歯薬系学生のための解剖 学の翻訳本である。図を主体としたもの。 担当部分: 筋系 (P23-46) 神経系 (P112-142)
2. The Physiological Coloring Book Kapit, Macey, Meisami	共訳	平成元年4月	廣川書店	監訳: 嶋井和也 アメリカで発行された医歯薬系学生のための生理 学の翻訳本である。図を主体としたもの。 担当部分: 血液と防御 (P135-140)
3. Textbook of Medical Physiolog	共訳	平成19年10月	エルゼビアジャパ ン	世界的な名著。 平滑筋、心筋、骨格筋の章を担当した。
4. ガイトン生理学 原著 第11版	共訳	平成22年8月	エルゼビアジャパ ン	総監訳: 御手洗玄洋 監訳: 小川徳雄、永坂鉄夫、間野忠明 第8章 平滑筋の興奮および収縮 P100-108
III 学術論文 (主な論文)				
[原著]				
1. ATP, ADP および AMP の酵素的定量法と各臓器 の含有量について	共著	昭和46年2月	診断と治療第59巻	NADH から NAD の紫外部吸光度の変化を利用し てヒト血中およびラット各臓器の核酸物質である ATP、ADP、AMP を測定分析した基本的な内容 の論文である。 全般に亘り担当。(P366-373) 中野昭一、吉岡利忠、清水隆介、斉藤喜好、成井 陽子

2 .On rapid cooling contracture of fast and slow muscle fibers.	単著	昭和51年 6月	Jikeikai Med.J. 第23巻	速筋、緩筋のカフェイン冷却拘縮を生じさせその収縮様式を形態、機能の面から検討し、筋小胞体のカルシウムイオンの取り込み放出の働きに相違があると考察した。学位論文である。(P106-116)
3 .Morphological features in transverse tubule and sarcoplasmic reticulum after denervated rat skeletal muscle.	共著	昭和52年12月	J. Clin. Electron Microscopy 第10巻	哺乳類骨格筋を除神経して萎縮筋を作り、特に筋収縮に関連する筋細胞内小器官の微細構造について報告した。幼若な筋細胞の形態に移行する傾向を得た。 全般に亘り担当。(P504-505) T.Yoshioka, S.Nakano
4 .Morphological alteration of internal membrane after denervated and steroid injected rat skeletal muscle. (II)	共著	昭和53年12月	J. Clin. Electron Microscopy 第11巻	除神経筋およびステロイド投与による神経原性および筋原性筋萎縮症について、筋細胞の微細構造の変化について記載したもの。 全般にわたり担当。(P576-577) T.Yoshioka, S.Nakano
5 .EM study on rat skeletal muscle fiber after long-term steroid injection.	共著	昭和54年12月	J. Clin. Election Microscopy 第11巻	ステロイドホルモンの長期投与によって生ずる筋萎縮の特徴について述べた。 全般に亘り担当。(P576-577) T.Yoshioka, S.Nakano
6 .Sarcomere disorder in skinned fibers during contraction.	共著	昭和55年10月	Muscle Contraction: Its Regulatory Mechanisms. ed. by S.Ebashi, K. Maruyama, M.Endo, Japan Sci. Soc.Press, Tokyo/ Springer- Verlag Berlin	Skinned fiber の筋節における A 帯の位置関係を静止時および強縮中の時に比較し、コネクチンの働きを考察した。特に筋小胞体および横行小管系の位置関係(担当部分)から分析した。(P475-481) Y.Umazume, T.Yoshioka
7 .Ultrastructural features of the sarcoplasmic reticulum during rapid cooling contracture and tetanus in frog skeletal muscle.	共著	昭和56年 2月	Jpn. J. Physiol.31: 29-42	骨格筋のカフェイン冷却中の筋小胞体の役割について超微形態と拘縮張力曲線から研究した。筋小胞体は膨化した後室温に戻すことによって元にもどり、その変化を定量化した。カルシウムイオンの放出が、筋小胞体の構造変を伴うものと考察した。 全般に亘り担当。 T.Yoshioka, K.Ohmori, T.Sakai
8 .The elastic structure of sarcomere: Connecting structure of M lines and elastic skeleton of sarcomere.	共著	昭和56年 6月	Jikeikai Med. J. 第28巻	Skinned fiber を用い蛋白質酵素で処理し、A-帯とM-帯との関係をみた初めての論文。蛋白分解酵素処理の時間経過を追ってみると、A-帯とI-帯の分離がみられ、両者を結合する巨大蛋白質コネクチンの働きが考察された。 全般に亘り担当。(P153-158) T.Yoshioka, R.Natori, Y.Umazume
9 .Long term injection of glucocorticoid hormone and its effect on the mitochondria of the ventricular muscle of a rat.	共著	昭和56年12月	Jikeikai Med. J. 第28巻	長期間ステロイドホルモンを投与された心筋のミトコンドリア容積を測定した。立体的測定法を用いた結果から、その量は有意に増し、代謝の亢進が考察された。 全般に亘り担当。(P267-277) T.Yoshioka, Y.Nakahara, S.Nakano, K.Ohmori

<p>10.Effects of relative metabolic rate and heart rate variation on the performance of flight attendants.</p>	<p>共著</p>	<p>昭和57年 2月</p>	<p>A v i a t . S p a c e Environ. Med. 第53巻</p>	<p>航空機における客室乗務員の業務内容を分析し、実際の飛行中それら業務を遂行中にどの位のエネルギーを消費するか測定し、地上での同作業とともに比較検討した。キャビン内業務は傾斜の弱い坂道歩行のエネルギー消費とほぼ同程度であったが、機内圧が低いために疲労度が地上の同作業時より高く示された。 全体を総括。(P127-132) T.Yoshioka, M.Narusawa, K.Nagami, C.Yabuki, Y.Nakahara, S.Nakano, C.Sekiguchi, K.Noda, T.Nagai, Y.Kobayashi, K.Ohmori, T.Sakai, M.Furusato</p>
<p>11.Width of junctional gap of the triad at various sarcomere lengths in frog skeletal muscle.</p>	<p>単著</p>	<p>昭和57年 6月</p>	<p>Jpn. J. Physiol. 第32巻</p>	<p>骨格筋を伸展してもその程度に関係なく筋小胞体と横行小管系は不変であり、強固に結合していることを超微細形態から研究し、興奮収縮連関とともに考察した。初めての論文。(P467-479)</p>
<p>12.Effects of partial denervation on the differentiation of muscle fiber types in the rats.</p>	<p>共著</p>	<p>昭和59年 6月</p>	<p>J. Physical Fitness Japan 第33巻</p>	<p>骨格筋に対する部分的除神経効果を組織化学的分野からみた。部分的な神経損傷であっても筋線維のタイプ分化に著しい影響を与えた。構造学的検索の部分を担当。(P130-140) M.Narusawa, T.Yoshioka, S.Nakano</p>
<p>13.The calcium and magnesium contents and volume of the terminal cisternae in caffeine- treated skeletal muscle.</p>	<p>共著</p>	<p>昭和59年 8月</p>	<p>J. Cell Biol. 第99巻</p>	<p>カフェイン拘縮中の筋小胞体内各種元素 (Na, Mg, P, S, Cl, K, Ca) を電子線マイクロプローブ分析法によって分析した。拘縮中には60%以上のカルシウム遊離がみられイオンの変換としてカリウムやマグネシウムの増加がみられた。また、拘縮中の筋小胞体の膨化は凍結置換法で得られた試料ではみられなかった。カルシウム遊離機構に関する論文。カルシウム放出を定量的に分析した初めての論文。 全般に亘って担当。(P558-568) T.Yoshioka, Somlyo, A.P.</p>
<p>14.Myofibrils and transverse tubules in glycerol-treated frog skeletal muscle.</p>	<p>共著</p>	<p>昭和59年12月</p>	<p>Tokai J. Exp. Clin. Med. 第9巻</p>	<p>グリセリンを用いて骨格筋細胞の膜構造を変性させ、その筋小胞体と横行小管系の超微細形態から、ある濃度で興奮収縮脱連関が生ずることがわかった。 全般に亘って担当。(P429-434) T.Yoshioka, K.Nagai, T.Terao, M.Miyoshi, S.Nakano</p>
<p>15.Connectin filaments link thick filaments and Z lines in frog skeletal muscle as revealed by immunoelectron microscopy.</p>	<p>共著</p>	<p>昭和60年12月</p>	<p>J. Cell Biol. 第101巻</p>	<p>コネクチン抗体を作り、免疫電子顕微鏡学的にこの弾性蛋白質の局在を初めて明らかにした論文。A帯に渡り、5個の結合部位が発見され、この働きにより筋原線維あるいは筋線維の構築が保たれている。 免疫電子顕微鏡の手法を用いて同定した部分を担当。 (P2167-2172) K.Maruyama, T.Yoshioka, H.Higuchi, K.Ohashi, S.Kimura, R.Natori,</p>
<p>16.The effects of detergent on the contractility and ultrastructure of frog skeletal muscle.</p>	<p>共著</p>	<p>昭和61年 5月</p>	<p>Jpn. J. Physiol. 第36巻</p>	<p>トライトンとブリッジの2種類の界面活性剤が骨格筋筋小胞体膜に及ぼす影響と超微形態とカフェイン冷却拘縮の面から追求した。電気刺激に反応しなくなった筋において、カフェイン拘縮がトライトン処理のある濃度で生ずるが、ブリッジ処理では生じない。興奮収縮脱連関について考察した。 全般に亘り担当。(P379-390) T.Yoshioka, K.Nagami, T.Tamaki, S.Nakano</p>

17.Effects of mild trypsin treatment on the passive tension generation and connective and splitting in stretched skinned fibers from frog skeletal muscle.	共著	昭和61年6月	Biomed. Res. 第7巻	コネクチン抗体を用いた免疫電子顕微鏡によるその局在とトリプシン処理によってA帯の一番端に存在する結合部位が消失するという論文。筋を引き伸ばした時に、その結合部位が最も抵抗する部分であり、コネクチンの役割を考察した。全般に亘り担当。(P181-186) T.Yoshioka, H.Higuchi, S.Kimura, K.Ohashi, Y.Umazume, K. Maruyama
18.Effect of magnetic field on the contractility and glycogen content in neuromuscular preparation.	共著	昭和62年2月	Tokai J. Exp. Clin. Med. 第12巻	1テスラ(10,000ガウス)の磁場内における骨格筋の収縮特性をみた。筋収縮疲労に至るまでの時間は短縮された。また、筋収縮エネルギー供給の観点からグリコーゲン含有量を分析した。全般に亘り担当。(P55-61) T.Tamaki, T.Yoshioka, S.Nakano
19.The effects of quinine on the calcium and magnesium content of the sarcoplasmic reticulum and the temperature- dependence of quinine contracture.	共著	昭和62年8月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第8巻	筋小胞体のイオンの分析を電子線マイクロプローブ分析法によって求め、キニーネ拘縮の時には約7割のカルシウムの遊離がみられ、マグネシウムが増加した。両イオンが通過する筋小胞体膜のチャンネルについて考察した。キニーネは膜のカルシウムATPaseを抑制して拘縮を引き起こすということを報告した。全般に亘り担当。(P322-328) T.Yoshioka, Somlyo, A.P.
20.Determination of metabolic profiles on single muscle fiber of different types.	共著	昭和62年8月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第8巻	哺乳類の骨格筋から単一筋線維を分離し組織化学的に3種類のタイプに分類し、その後それぞれの酸化酵素系および解糖系酵素活性について測定した。1本の筋線維を3等分して形態、生化学的分析に用いた。3種類の筋線維は上記2種類の酵素活性をもつが、タイプ別にそれらの活性が異なった。全般に亘り担当。(P342-348) H.Takekura, T.Yoshioka
21.Mitochondrial calcium uptake after a caffeine contracture in mammalian slow and fast skeletal muscles.	単著	昭和62年10月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第8巻	1987年5月に開催された生筋における国際シンポジウムの抄録。ラットの速筋と緩筋のカフェイン拘縮中には多量のカルシウムをミトコンドリアに取り込み、他の細胞内小器官のイオン環境とともに報告した。(P466)
22. 筋肉(骨格筋)に関するセッションについて	単著	昭和63年3月	宇宙開発事業団委託業務報告書	日本人搭乗員の医学心理学選抜及び健康管理に関する調査検討の項目の仲で、骨格筋の機能について述べた。(P66-69, P94-100, P122-125)
23. 骨格筋細胞のカルシウムイオン濃度測定 - EPMA(XMA)による -	単著	昭和63年10月	生体の科学 第39巻	生きた骨格筋細胞を用いて、瞬間凍結試料を得てEPMA法により筋細胞小器官に存在するカルシウムイオンを定量的に分析した結果の報告。(P376-378)
24. Positing of actin filaments and tension generation in skinned muscle fibers released after stretch beyond overlap of the actin and myosin filaments.	共著	昭和63年12月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第9巻	筋鞘剥離標本を作り、A,I接合部が分離するまで伸長したときのアクチンフィラメントの動態について報告した。筋節中のアクチンフィラメントの存在状態が張力発生に強く影響していたことが判明した。電顕による微細構造学的な部分を担当。(P491-498) H.Higuchi, T.Yoshioka, K.Maruyama

25.Ultrastructural and metabolic profiles on single muscle fibers of different types after hindlimb suspension in rats.	共著	平成元年6月	Jpn. J. Physiol. 第39巻	懸垂下肢萎縮筋から分離された筋線維の特徴について、酸化系および解糖系酵素活性の代謝的面から報告した。有意に酸化系酵素活性の低下と筋蛋白の崩壊が認められた。 構造学的分析を担当。(P385-396) H.Takekura, T.Yoshioka
26. 予め持久性運動を負荷した骨格筋に対する体躯懸垂の影響	共著	平成元年6月	宇宙航空環境医学 第26巻	懸垂の負荷を与える前に、適切な持久性運動負荷を与えて筋機能を上昇させておいた場合、どの程度獲得した性質が残存しているかを報告した。有意に残存することが筋機能の面から判明した。 全般に亘り担当。(P47-59) 吉岡利忠、竹倉宏明
27. Specific mitochondrial responses to running training are induced in each type of rat single muscle fibers.	共著	平成元年8月	Jpn. J. Physiol. 第39巻	各種の運動トレーニングを与えた場合、3種類筋細胞内のミトコンドリア容量に変化が示されたことを報告。持久性運動タイプではタイプI、タイプII aにミトコンドリアが増加した。 全般に亘り担当。(P497-509) H.Takekura, T.Yoshioka
28. Ultrastructural and metabolic characteristics of single muscle fibers belonging to the same type in various muscle in rats.	共著	平成2年4月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第11巻	名称の異なる下肢骨格筋から分離した単一筋線維は、たとえ同じ線維でもその微細構造や生化学特性が異なることを報告した。筋生理学の基本となる論文。 全般に亘り担当、総括 (P98-104) H.Takekura, T.Yoshioka
29. Different metabolic responses to exercise training programmes in single rat muscle fibers.	共著	平成2年4月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第11巻	内容の異なるトレーニングプログラムを与えたラット下肢筋では、細胞レベルでそれぞれの構造や、酵素学的な性質において適応現象がおきていることを報告。 全般に亘り担当、総括。(P105-113) H.Takekura, T.Yoshioka
30. The effect of endurance exercise on suspension induced atrophy of rat slow and fast skeletal muscle fibers.	共著	平成2年11月	Proc. 17th Int' l Sympo. Space Tech. Sci.	体躯懸垂による萎縮筋が持久性トレーニングにより回復されるかどうかを報告した。 全般に亘り担当。(P2041-2045) T.Yoshioka, K.Yamashita, H.Kasugai, K.Shimizu, H.Takekura
31. Profiles of creatine kinase isoenzyme compositions in single muscle fibers of different type.	共著	平成3年2月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第12巻	3種類の骨格筋細胞中のCKとそのアイソザイムの特徴について述べた。トータルCKはタイプII b、タイプII a、タイプIの順で高く、骨格筋由来のアイソザイムも同様の傾向が示された。 全般に亘り担当。(P37-44) K.Yamashita, T.Yoshioka
32. ウォーキングは中高年者の血管、骨、筋力をよい状態に保つ	単著	平成3年4月	暮らしと健康 第46巻	早い速度での歩行を継続することで心循環器系によい結果をもたらすことを説明した。走行速度と心拍数の関係から記載した。(P38-40)
33. ウルトマラソン(100km走)後の筋肉痛について	共著	平成3年7月	疲労と休養の科学 第6巻	遅延性筋肉痛が、超長距離走において発生するプロセスについて報告。血中諸物質の動向からも考察し記載した。 全般に亘り担当および総括。(P71-80) 渡辺雅之、有吉正博、桑原仁史、吉岡利忠、山下勝正、小林啓三、田中宏暁、清永明

34.The effect of apomorphine on operant behavior in rats under normoxic and hypoxic conditions.	共著	平成3年11月	Aviat. Space Environ. Med. 第62巻	低圧環境で餌育したラットの行動がある種の薬物によってどのように影響したかを分析したもの。総括した。(P1050-1053) I.Sakurai, T.Sato, <u>T.Yoshioka</u> , A.Nakamura
35. 筋収縮のメカニズムはどこまで分かったのか	共著	平成4年4月	Pharma Media 第10巻	筋収縮のメカニズムについて最もホットな話題をまとめたもの。(P11-14) 吉岡利忠、山下勝正
36. 骨格筋ディペプチドは筋持久能力判定の指標になりうる	共著	平成4年6月	デサントスポーツ科学 第13巻	アンセリン、カルノシンは筋収縮エネルギー供給に関するディペプチドであるが、筋組織中のこの種のアミノ酸含有量と筋持久能力をみた論文。(P64-74) 吉岡利忠、田中みどり、山下勝正
37.Localization and elasticity of connecting (titin) filaments in skinned frog muscle fibers subjected to partial depolymerization of thick filament.	共著	平成4年6月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第13巻	筋繊維の太いフィラメントを蛋白分解酵素で除去したときの筋収縮機能をみた論文。細いフィラメントからの結合が明らかになり、筋中コネクチンの働きを考察したもの。微細構造学的分野を担当した。総括した。(P285-294) H.Higuchi, T.Suzuki, S.Kimura, <u>T.Yoshioka</u> , K.Maruyama, Y.Umazume
38.Behavioral adaptation to sustained hypobaric hypoxia manifested by timing behavior in rats. (Part I)	共著	平成4年6月	Jpn. J. Aerospace. Environ. Med. 第29巻	低圧環境下におけるラットの行動変化についての迷路を使った研究成果。総括した。(P285-294) T.Sakurai, T.Sato, <u>T.Yoshioka</u> , R.Yurugi
39.Activities of creatine kinase isoenzymes in single skeletal muscle fibers of trained and untrained rats.	共著	平成4年6月	Pflügers Arch. 第421巻	単一筋繊維のクレアチンキナーゼおよびそのアイソザイムなどの酵素活性の変化と運動における影響をみた。筋繊維タイプ別の特徴と運動によってどのように変化するかをみた。全般に亘って担当、総括した。(P270-273) K.Yamashita, <u>T.Yoshioka</u>
40.Effect of endurance training on disuse muscle atrophy by body suspension in rats.	共著	平成4年8月	Med.Sports.Sci. 第37巻	尾部懸垂が引き起こす廃用性萎縮筋に対する筋肉トレーニングの影響をみたもので、筋繊維レベルでの対応結果について報告したもの。タイプIおよびタイプII a 線維に対する適応変化が著しいことを記載した。 全般に亘り担当。(P150-161) <u>T.Yoshioka</u> , H.Takekura, K.Yamashita
41.Elastic filaments <i>in situ</i> in cardiac muscle: Deep-etch replica analysis in combination with selective removal of actin and myosin filament.	共著	平成5年2月	J.Cell Biol. 第120巻	急速凍結試料をエッチングして、筋収縮蛋白系を可視化し、心筋の弾性線維に関する新しい知見を発見した論文。コネクチンの存在を認めた。電子顕微鏡による実験研究の部分を担当した。(P711-724) T.Funatsu, E.Kono, H.Higuchi, S.Kimura, S.Ishiwata, <u>T.Yoshioka</u> , K.Maruyama, S.Tsukita
42.Differences in ultrastructural and metabolic profiles within the same type of fibers in various muscles of young and adult rats.	共著	平成6年3月	Acta Physiol. Scand. 第150巻	若年、高齢のラットの下肢から分離された同一タイプの筋繊維の微細構造と代謝特性を分析した論文。 全般に亘り担当および総括。(P333-344) H.Takekura, N.Kasuga, <u>T.Yoshioka</u>

43. Calcium movement of sarcoplasmic reticulum of slow and fast muscle in rats.	共著	平成6年3月	Proceeding of the 45th International Astronautical Federation	遅筋、速筋の筋鞘剥離線維の筋小胞体のカルシウム動員機構に関する論文。両者にはカルシウムの動員機構が異なることがわかった。全般に亘り担当。(P 9-14) T.Yoshioka, K.Yamasita-Goto
44. Relationship between exercise-induced creatine kinase and its activity in muscle.	共著	平成6年9月	Adv. Exerc. Sports Physiol. 第1巻	筋運動とクレアチンキナーゼおよびそのアイソザイムとの関連についての総説的論文。総括した。(P19-24) K.Yamasita-Goto, T.Yoshioka
45. Mitochondrial Ca <sup>2+</sup> transport in slow and fast muscles of endurance exercise trained rat.	共著	平成6年9月	Adv. Exerc. Sports Physiol. 第1巻	持久性運動を与えたときの遅筋や速筋のミトコンドリアのカルシウム動態に関する論文。ミトコンドリアに取り込まれるカルシウム量が増加した。総括した。(P57-64) M.Ogane, T.Yoshioka, H.Takekura
46. 過重力がニワトリの骨格筋のミトコンドリア容量および細胞内膜系の微細構造に及ぼす影響	共著	平成6年12月	宇宙航空環境医学 第31巻	2 G 環境下(遠心力負荷により)で飼育したニワトリの下肢筋を用いて、筋細胞中のミトコンドリア容量を立体的分析によって得て、有意な増加をみた。全般に亘り担当および総括。(P57-64) 吉岡利忠、山下勝正、長嶋健治、北史男、大仲広美、目鳥幸一、小池勝也、高橋周七
47. A-band movement of junctional gap dissociation during caffeine-induced contraction of skeletal muscle.	共著	平成7年6月	Tokai J. Exp. Clin. Med. 第20巻	薬物で筋収縮をおこした筋細胞内膜系の変化について研究した論文。筋節中のA-帯の動きとフィート構造変化との相関をみて、拘縮の特徴について述べた。全般に亘り担当。(P99-108) T.Yoshioka, T.Shiroto, T.Tazoe, O.Tanaka, M.Kimura, K.Yamasita-Goto,
48. Influence of sarcomere length and selective elimination of myosin filaments for the localization and orientation of triads in rat muscle fibers.	共著	平成8年2月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第17巻	太いフィラメントを除いた筋線維の筋内部膜系の特徴についての論文。横行小管系と筋小胞体を作る三つ組構造の位置関係を重点的に検索したもの。構造学的分野の担当と総括。(P235-242) H.Takekura, N.Kasuga, T.Yoshioka
49. Morphological changes in the triads and sarcoplasmic reticulum of rat slow and fast muscle fibers following denervation and immobilization.	共著	平成8年3月	J. Muscle Res. Cell Motil. 第17巻	遅筋と速筋の筋内部膜系について除神経と不動化したときの変化についてみた論文。筋小胞体と三つ組構造が萎縮によって幼若化する傾向にあった。構造学的分野と担当を総括。(P391-400) H.Takekura, N.Kasuga, K.Kitada, T.Yoshioka
50. Calcium movement of sarcoplasmic reticulum from hindlimb suspended muscle.	共著	平成8年3月	Acta Astronautica 第38巻	懸垂萎縮筋細胞内のカルシウム動態に関する論文。筋鞘剥離標本を作りカルシウムを与えて張力発揮分析から考察した。全般に亘り担当。(P209-212) T.Yoshioka, T.Shirota, T.Tazoe, K.Yamashita-Goto
51. 筋肉疲労	共著	平成8年10月	喘息第9巻	筋肉疲労に関する総説。呼吸筋を含めた骨格筋の疲労の要因について最新の知見も加えて述べたもの。(P87-90) 吉岡利忠、山下勝正

52. 筋肉痛の発生機序	単著	平成9年2月	日本医事新報 第3800巻	遅延性筋肉痛の発生メカニズムを詳細に説明した総説。最近の知見を豊富に加えた論文。(P110-111)
53. ヒトの体と宇宙	単著	平成9年5月	歯界展望第89巻	宇宙環境下、特に無重力環境が生体に与える生理機能に関して概説した。宇宙時代にむけて簡易に解説したもの。(P1094-1098)
54. Effects of spaceflight on enzyme activities and ultrastructure of fast-type skeletal muscle of rat.	共著	平成9年10月	Jpn.J.physiol. 第47巻	実際に宇宙滞在(2週間)したラットの下肢筋から速筋線維を分離して、生化学的検索および形態学的検索をおこなった貴重な論文。(P471-476) T.Yoshioka, K.Yamashita-Goto, O.Tanaka, H.Uchida, M.Kimura, K.Fujita, C.Sekiguchi, S.Nagaoka
55. 骨格筋細胞と環境因子	単著	平成11年2月	体力科学 第48巻	骨格筋細胞がトレーニングあるいは不使用によってどのように変化するかを述べたもの。平成10年に開催された第53回日本体力医学会大会の会長講演をまとめたもの。(P1-4)
56. 環境と骨格筋	単著	平成11年4月	日体大体育研究雑誌 第24号	骨格筋に対する生体内・外からの環境変化について、組織学的、細胞学的、分子生物学的に総説したもの。さらに、これまでの研究成果について記載したもの。 (P191-205)
57. Myonucleol domain and myosin phenotype in human soleus after bed rest with or without loading.	共著	平成11年10月	J.Appl.Physiol. 第85巻	長期に亘るベッドレストで廃用性筋萎縮を生じさせ、その筋細胞の分子生物学的検索をおこなったもの。ミオシンフィラメントおよび筋細胞核について免疫組織学的結果を得たところ、幼若な状態が示された。筋に負荷を与えたときの変化は少なかった。(P1776-1785) Y.Ohira, T.Yoshinaga, M.Ohara, I.Nonaka, T.Yoshioka, K.Yamashita-Goto, B.S.Shenkman, I.B.Kozlovskaya, R.R.Roy, V.R.Edgerton
58. そもそも疲労とは何?	単著	平成11年11月	Training Journal 第21巻	スポーツ選手における疲労について、疲労とつき合うことで競技成績アップを期待できることを、生理学的に述べたもの。(P10-12)
59. 運動場面におけるリラクスの効果	共著	平成12年2月	日本医事新報 第3959号	競技開始におけるリラクスの効果において、特に骨格筋の対応が生理学的にどのようなになっているかについて述べたもの。(P111-112) 吉岡利忠、後藤勝正
60. Histochemical responses of human soleus muscle fibers to long-term bedrest with or without counter-measures.	共著	平成12年2月	Jpn. J. Physiol. 第50号	長期ベッドレスト負荷による萎縮筋(ひらめ筋)を生検して、免疫組織学的手法を用いて筋線維タイプを分析した。予防策としてベッド上での運動負荷が、どの程度効果あるものか細胞レベルで検索した。 筋生検、光学顕微鏡手技を担当した。(P41-47) Y.Ohira, T.Yoshinaga, I.Nonaka, M.Ohara, T.Yoshioka, K.Yamashita-Goto, R.Izumi, K.Yasukawa, C.Sekiguchi, B.S.Shenkman, B.Kozlovskaya
61. 微小重力・老化・寝たきりに伴う筋萎縮機序	共著	平成12年3月	医学のあゆみ 第193巻	加齢、寝たきりなどによって生ずる筋萎縮のメカニズムについて概説したもの。(P597) 吉岡利忠、後藤勝正
62. 筋萎縮のメカニズムー細胞内蛋白質分解機構とその制御ー	共著	平成12年5月	医学のあゆみ 第193巻	細胞レベルにおける筋収縮蛋白質の崩壊(萎縮)について最近の知見も加えて概説したもの。特に細胞内蛋白質分解酵素の働きに重点をおき記載した。(P598-603) 吉岡利忠、後藤勝正
63. 高齢者における筋の増量	共著	平成12年11月	日本医事新報 第3996号	高齢者においても適切な抵抗性筋トレーニングを与えると、十分な筋力量を維持し、獲得可能であるということを述べたもの。(P96-97) 後藤勝正、吉岡利忠

64. 疲労研究会の現況	共著	平成13年 4月	体力科学第50巻	創立15周年を迎えた疲労研究会の足跡と、これまで本研究会に携わった専門家および報告された論文などについてまとめたもの。(P267-276) 吉岡利忠、小林康孝
65. 「精神分裂病患者の体力と運動療法」	単著	平成13年 6月	わかりやすいデサントスポーツ科学第5巻	タイトルの研究報告書についてわかりやすく解説したもの。(P23)
66. 心拍の動揺から見た精神的作業負荷の様相	共著	平成13年 8月	疲労と休養の科学第16巻	心拍の動揺 (R-R 間隔) からそのバラツキを分析して、作業中、休憩中の自律神経の反応をみたもの。すなわち、作業は集中してできたか、休憩中は充分リラックスできたかが判定でき、日常の労働に反映することを期待してまとめたもの。全般に亘り担当するとともに総括した。(P23) 吉岡利忠、小林康孝、後藤勝正、吉原紳、山本泰秀、中野哲也、川嶋賢一、新里昭保
67. Maximal and submaximal forces of slow fibers in human soleus after bed rest.	共著	平成13年 9月	J. Appl. Physiol. 第91巻	4 ヶ月間のベッドレスト負荷で萎縮した骨格筋の形態、機能的な研究結果、宇宙医学的な立場から追求した。 (P417-424) K. Yamashita, R. Okuyama, M. Honela, K. Kawasaki, K. Fujita, T. Yamada, I. Nomaka, Y. Ohira, <u>T. Yoshioka</u>
68. Heat stress facilitates stretch-induced hypertrophy of cultured muscle cells.	共著	平成14年 6月	J. Appl. Physiol. 第9巻	培養骨格筋細胞を用い、熱ショック電気がもたらす筋肥大の研究結果。(P145-146) K. Yamashita-Gots, Y. Ohira, R. Okuyama, H. Sugiyama, M. Honda, T. Sugiura, S. Yamada, T. Akema, <u>T. Yoshioka</u>
69. Heat stress facilitates the recovery of atrophied soleus muscle in rat.	共著	平成16年 6月	Jpn. J. Physiol 第54号 (3)	萎縮骨格筋に熱を負荷することで効果的に予防することが可能になった。分子生物学的手法が用いられた。(P285-293) K.Goto, M.Honda, T.Kobayashi, K.Uehara, A.Kojima, T.Akema, T.Sugiura, S.Yamada, Y.Ohira, <u>T. Yoshioka</u>
70. 心拍リズムの微妙なゆらぎから心のゆとり度を評価する試み	単著	平成16年12月	弘前市医師会報第39号 (6)	心拍リズムから交感神経・副交感神経の緊張状態を得て、「心のゆとり度」を分析した。(P30-36)
71. 筋疲労のメカニズム	共著	平成17年 5月	整形・災害外科第48巻 (5)	骨格筋疲労の機構について、組織レベル、細胞レベルおよび分子レベルから概説した。(P389-399) 小島敦、後藤勝正、 <u>吉岡利忠</u>
72. Heat stress as a countermeasure for prevention of muscle atrophy in microgravity environment.	共著	平成17年10月	Jpn. J. Aerospace Environ. Med. 第42巻 (2)	微小重力環境による骨格筋萎縮について、熱負荷をすることにより、効果的に予防できたということを示した。(P51-59) K.Goto, M.Honda, A.Kojima, T.Kobayashi, K.Uehara, S.Morita, T.Naitou, T.Akema, T.Sugiura, Y.Ohira, <u>T. Yoshioka</u>
73. Effects of heat stress on the regeneration of injured skeletal muscle in rats.	共著	平成17年10月	J. Gravit. Physiol 第12巻 (1)	ラット骨格筋に傷害を与えて、その回復過程を分子生物学的手法により研究したものであり、特に傷害筋に熱負荷をした場合に筋細胞内シグナル伝達機構の上でも効果的に回復する過程がみられた。(P115-116) <u>T. Yoshioka</u> , K.Goto, A.Kojima, T.Akema, T.Sugiura, Y.Ohira.

74.Heat stress facilitates the regeneration of injured skeletal muscle in rats.	共著	平成19年 3月	J. Orthop. Sci. 第12巻	ラット骨格筋に傷害を与えて、その回復過程を分子生物的手法を用いて研究した論文.特に熱負荷によって効率よく回復することが報告された。(P74-82) A.kojima, K.Goto, S.Morioka, T.Naito, T.Akema, H.Fujiya, T.Sugiura, Y.Ohira, H.Aoki, T.Yoshioka
75.Geranylgeranylacetone induces heat shock protein 72 in skeletal muscle cells.	共著	平成19年 4月	Bioch. Biophys. Res.Comm. 第358巻	一般薬局名セルベックス (GGA) による現筋細胞内熱ショック蛋白72の発現を示し、エリート競技選手の筋肉量増量のみならずリハビリテーションを受けている患者に効果的な機能回復が期待されることを示した。(P331-335) K.Goto, A.kojima,S.Morioka, T.Naito, T.Akema, Y.Matsuba, H.Fujiya, T.Sugiura, Y.Ohira, T.Yoshioka
76. Effects of functional overloading on the regeneration potential of injured skeletal muscles in mice.	共著	平成19年 7月	J.Gravit. Physiol. 第14巻 (1)	マウス傷害骨格筋を用い、機能的な負荷の程度によってその回復過程が異なることを述べた。(P101-102) K.Goto, S.Morioka, T.Naito, T.Akema, Y.Matsube, T.Sugiura, Y.Ohara, & T.Yoshioka.
77. 香りと形態の変化によるストレス緩和効果の研究 II	共著	平成19年 9月	Aroma Res. 第8巻 (3)	森林の香り、柑橘類の香りの中で、三角、四角、丸の形を視るあるいは触れることで、自律神経活動の変化をみたところ、柑橘類の香りかつ三角などを認識した場合、心のゆとりが高くなることがわかった。(P56-61) 肥田不二夫、吉岡利忠、小林郁夫、川嶋賢一、新里昭保、田島幸信、八木俊衣
78. Adaptation of skeletal muscle cells to stresses induced by the exposure to various environments.	単著	平成19年12月	Adv. Exerc. Sports Physiol. 第13巻 (3)	種々な環境におかれた骨格筋筋線維の形態学的、機能学的な変化について概説した。(P45)
79. 香りが心拍動リズムの動揺に与える影響	共著	平成20年 3月	宇宙航空環境医学 第45巻 (1)	香りが心臓拍動の規則性やリズムに与える影響をみたものでグレープフルーツ系の香りが、いわゆる心のゆとり度を増すことを示した。(P11-16) 八木俊衣、田島幸信、廣濱秀次、肥田不二夫、小林郁夫、川嶋賢一、新里昭保、吉岡利忠
80. アンチエイジング、ヘルシーエイジングとともにサクセスフルエイジングを2つの例から	共著	平成20年10月	アンチエイジング医学—日本抗加齢医学会雑誌 第4巻 (5)	運動・エクササイズによってヒトの身体機能高進があることを示し、実年齢との比較をした。また、年齢にふさわしい行動、運動、日常生活を勧めた内容。(P79-81) 小川幸裕、吉岡利忠
81. Administration of granulocyte colony-stimulating factor facilitates the regenerative process of injured mice skeletal muscle via the activation of AKT/ GSK 3 $\alpha$ $\beta$ signals.	共著	平成21年 5月	Eur. J. Appl. Physiol. 第105巻	カルデオトキシンによる筋傷害に対して G-CSF 投与が効果的であるかどうかについて述べた。筋細胞内シグナル伝達系の活性が示され、筋細胞の再生に極めて効果的であることが示された。(P643-651) T.Naito,K.Goto,S.Morioka,Y.Matsube,T.Akema,T.Sugiura,Y.Ohira,M.Beppu,T.Yoshioka
82.Heat stress : A hypertrophic stimulus for skeletal muscle	共著	平成21年12月	Muscle Cell Physiology ed by yoshinobu Ohira Osaka univ.Press	K.Goto,Y.Ohira,T.Yoshioka P44-50

83.Role(s) of gravitational loading during developing period on the growth of rat soleus muscle fibers.	共著	平成22年 1月	J.Appl.Physiol,108	Kawano.F,Goto.K,Wang,X.D.,Terada.M,Ohira.T,Nakai.N, <u>Yoshioka.T</u> ,and Ohira.Y P676-685
84. 発育期の運動が神経・筋の発育・発達に及ぼす影響：ヒトにおける研究の動向と必要性	単著	平成22年 2月	体力科学 vol.59 (1)	P34-38
85.A possible role of NF-κB and HSP72 in skeletal muscle hypertrophy induced by heat stress in rats.	共著	平成22年	G e n . P h y s i o l . Biophys.,29	Ohno.Y,Yamada.S,Sugiura.T,Ohira.Y, <u>Yoshioka.T</u> ,and Goto.K P234-242
86.Responses of muscle mass,strength and gene transcripts to long-term heat stress in healthy human subjects.	共著	平成23年 2月	E u r . J . A p p l . Physiol.,111	Goto.K,Oda.H,Kondo.H,Igaki.M,Suzuki.A,Tsuchiya.S,Murase.T,Hase.T,Fujiya.H,Matsumoto.I,Naito.H,Sugiura.T,Ohira.Y,and <u>Yoshioka.T</u> P17-27
87.Absence of heat shock transcription factor 1 retards the regrowth of atrophied soleus muscle in mice.	共著	平成23年 8月	J.Appl.Physiol.,111	Yasuhara.K,Ohno.Y,Kojima.A,Uehara.K,Bepu.M,Sugiura.T,Fujimoto.M,Nakai.A,Ohira.Y, <u>Yoshioka.T</u> ,and Goto.K P1142-1149
88.Heat stress-associated skeletal muscle hypertrophy and gene expressions in healthy human subjects.	共著	平成23年	J.Muscle Res.Cell Motil 32:368	<u>T.Yoshioka</u> ,T.Sugiura,Y.Ohira,K.Goto P89
89.Skeletal muscle plasticity in response to mechanical loading and heat stress in heat shock transcription factor 1-null mice.	共著	平成24年 9月	J.Muscle Res. Cell motil,33 : No.3~4	<u>T.Yoshioka</u> ,Y.Ohno,A.Goto,A.Ikuta,T.Ohira,M.Suzuki,T.Egawa,K.Yasuhara,T.Koya,S.Nishizawa,A.Nakai,S.Takano,Y.Ohira,K.Goto P276
90.Effects of heat stress on muscle mass and the expression levels of heat shock proteins and lysosomal cathepsin L in soleus muscle of young and aged mice.	共著	平成24年 9月	M o l . C e l l . Biochem.369(1-2)	Ohno.Y,Yamada.S,Goto.A,Ikuta.A,Sugiura.T,Ohira.Y, <u>Yoshioka.T</u> ,Goto.K P45-53
91.「宇宙医学」が超高齢社会の問題を解決する	単著	平成25年 6月	En-ichi	P14-17
92. 宇宙医学に学ぶ健康長寿	単著	平成25年10月	弘前市医師会報 第351号	巻頭言、P1-3
93.Heat shock transcription factor 1-deficiency attenuates overloading-associated hypertrophy of mouse soleus muscle.	共著	平成26年 1月	PLoS ONE 8(10)	Koya.T,Nishizawa.S,Ohno.Y,Goto.A,Ikuta.A,Suzuki.M,Ohira.T,Egawa.T,Nakai.A,Sugiura.T,Ohira.Y, <u>Yoshioka.T</u> ,Bepu.M,and Goto.K P1-10 e77788

94.Loading-associated expression of TRIM72 and caveolin-3 in antigravitational soleus muscle in mice.	共著	平成26年12月	Physiol.Rep.2(12)	Ohno.Y,Sugiura.T,Ohira.Y, <u>Yoshioka.T</u> ,and Goto.K
95. 宇宙医学に学ぶ健康維持・増進	単著	平成27年3月	日本ヒューマンケ ア学会誌 vol.8 (1)	P27-30
96.Sumoylated a-skeletal muscle actin in the skeletal muscle of adult rats.	共著	平成27年7月	Mol Cell Biochem 409(1-2)	M.Uda,H.Kawasaki,K.Iizumi,A.Shigenaga,T.Baba,H.Naito, <u>T.Yoshioka</u> ,F.Yamakura P59-66
97.Deficiency of heat shock transcription factor 1 suppresses heat stress-associated increase in slow soleus muscle mass of mice.	共著	平成27年9月	Acta Physiol.215(4)	Y.Ohno,T.Egawa,S.Yokoyama,A.Nakai,T.Sugiura,Y.Ohira, <u>T.Yoshioka</u> ,K.Goto P191-203
98. オリンピアン・パラリンピアンと体力科学について考える	共著	平成28年2月	体力科学 第65巻第1号	<u>吉岡利忠</u> 、岡村吉隆 <u>P10-13</u>
99.Effects of icing or heat stress on the induction of fibrosis and/or regeneration of injured rat soleus muscle	共著	平成28年7月	J.Physiol Sci.66(4)	T.Shibaguchi,T.Sugiura,T.Fujitsu,T.Nomura,T.Yoshihara,H.Naito, <u>T.Yoshioka</u> ,A.Ogura and Y.Ohira (P353-357)
100.Suppression of myostatin stimulates regenerative potential of injured antigravitational soleus muscle in mice under unloading condition	共著	平成28年8月	Int.j.Med.Sci.13(9)	Y.Ohno,Y.Matsuba,N.Hashimoto,T.Sugiura,Y.Ohira, <u>T.Yoshioka</u> ,K.Goto (P680-685)
101. (総説) 高齢者の生体機能、特に筋器官(骨格筋)における一考察	単著	平成29年3月	弘前学院大学大学 院社会福祉学研究 科社会福祉学研究 第5号	<u>吉岡利忠</u> 弘前学院創立130周年記念号 (P1-9)
102. 医療従事者におけるコミュニケーションへの一考	単著	平成31年3月	弘前学院大学大学 院社会福祉学研究 科社会福祉学研究 第7号	P 5 -10
103. 高齢化社会に向けて健康維持・増進のための骨格筋機能向上を目指す方略	単著	令和2年3月	弘前学院大学大学 院社会福祉学研究 科社会福祉学研究 第8号	P 1 - 8
104. 変幻自在な筋繊維タイプ	単著	令和2年6月	弘前市医師会報 No.391号	P80-81

105. 時間がかかりました	单著	令和元年10月	弘前市医師会報 9・10月号 (第387号)	P68-69
106. 日本医学会第39分科会	单著	令和元年12月	弘前市医師会報 11・12月号 (第388号)	P127-128
107. 日本宇宙航空環境医学会	单著	令和2年2月	弘前市医師会報 1・2月号 (第389号)	P84-85
108. 高齢化社会に向けて健康維持・増進のための骨格筋機能向上を目指す方略	单著	令和2年3月	弘前学院大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学研究第8号	P 1 - 8
109. 環境と筋肉	单著	令和2年4月	弘前市医師会報 3・4月号 (第390号)	P111-112
110. 変幻自在な筋線維タイプ	单著	令和2年6月	弘前市医師会報 5・6月号 (第391号)	P80-81
111. ヒートショックプロテイン、HSP	单著	令和2年8月	弘前市医師会報 7・8月号 (第392号)	P51-52
112. カルシウム：ほんの少しのお話です	单著	令和2年10月	弘前市医師会報 9・10月号 (第393号)	P57-58
113. 安産の神さま	单著	令和2年12月	弘前市医師会報 11・12月号 (第394号)	P76-77
114. Estimation of dietary <sup>14</sup> C dose coefficient using <sup>13</sup> C-labelled compound administration analysis	共著	令和2年	Scientific Reports natureresearch (2020) 10:8156	T.Masuda,T.Yoshioka,T.Takahashi,H.Takeda, H.Hatta,K.Matsushita,Y.Tako,Y.Takaku,S.Hisamatsu
115. Estimation of radiation dose from ingested tritium in humans by administration of deuterium-labelled compounds and food	共著	令和3年2月	Scientific Reports natureresearch (2021) 11:2816	T.Masuda,T.Yoshioka